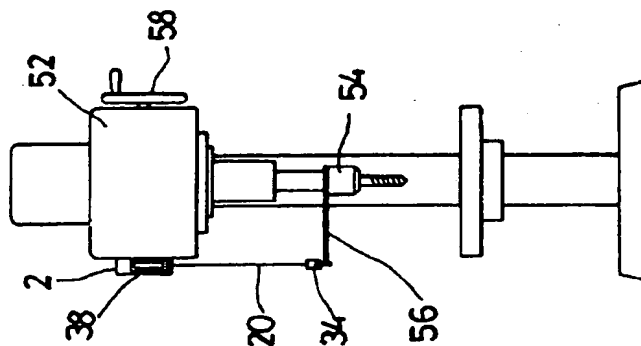


第 4 図



収 入
印 紙

手 続 補 正 書

昭和59年8月17日

適

特許庁長官 殿

1. 事件の表示

昭和59年実用新案登録願第68789号

2. 考案の名称

造尺型デジタル測定表示器

3. 補正をする者

事件との関係 実用新案登録出願人

セタガイケジリ

住 所 (居所) 東京都世田谷区池尻3-1-3

ムトウコウギョウ

氏 名 (名称) 武 藤 工 業 株 式 会 社

4. 代理人

住 所 (居所) 〒150 東京都渋谷区神宮前6-19-1

高野第1ビル9階

氏 名 (名称) (6775) 井理士 西 島 綾 雄

5. 補正の対象

(1) 実用新案登録請求の範囲の欄 (2) 考案の詳細な説明の欄

6. 補正の内容

(1) 実用新案登録請求の範囲を別紙の通り訂正する。

実開60-179903

方式
審査
29

(1) 明細書中、12ページ6行目

「互いに直角な」

とあるは、削除する。

2. 実用新案登録請求の範囲

ケーシング2内に巻回された長尺状部材20の先端をケーシング2の外部に配置し、該長尺状部材20の直線方向の移動量をケーシング2に内蔵した回転体4の回転量に変換し、この回転体4の回転量を、表示部38にデジタルに表示するようにした巻尺型デジタル測定表示器において、前記ケーシング2の少なくとも二つの側壁のそれぞれに前記表示部38のカバー38aを嵌合するための取付凹部36、46を穿設し、該取付凹部36、46のそれぞれに配線用の穴42、47を透設し、前記取付凹部の36、46のうちの一つの取付部36に前記表示部38のカバー38aを取付け、前記取付凹部36、46のうちの他の取付部46に前記穴36、46を穿設するためのカバー48を取付けたことを特徴とする巻尺型デジタル測定表示器。



実用新案登録願 (8)

昭和55年9月27日

(4,000円)

特許庁長官 殿

1. 考案の名称

電子式スケール

2. 考案者

住所 大阪府阿倍野区長池町22番22号

シャープ株式会社内

沢野宣英 (他2名)

氏名

3. 実用新案登録出願人

住所 大阪府阿倍野区長池町22番22号

名称 (504) シャープ株式会社

代表者 佐伯 旭

4. 代理人

住所 大阪府阿倍野区長池町22番22号

シャープ株式会社内

氏名 加藤士 (6236) 福士 愛彦

連絡先 電話 (東京) 250-1161 東京支社技術課

5. 添付書類の目録

(1) 明細書

(2) 図面

(3) 委任状

(4) 願書副本

明細書

1. 考案の名称

電子式スケール

2. 実用新案登録請求の範囲

1. 巻尺手段の引き出し量を電子的に検知して測長データを得る電子式スケールにおいて、到来するある測長データを記憶させ、且つこの時点より一定時間経過後に到来する測長データと前記記憶させた測長データとを比較する手段と、該比較の結果前記両データが一致したとき、該測長データを音声にて報知する手段とを備えたことを特徴とする電子式スケール。

3. 考案の詳細な説明

本考案は巻尺手段の引出し量を電子的に検知し得られた測長データを音声にて報知し得る電子式スケールに関する。

電子式スケールとしてはメジャー、身長計等種々あるが、従来のこの種の電子式スケールにあつては巻尺手段の引き出し量を電子的に検知し、得られた測長データをデジタル的に表示するよう

(1)

137732
55 138032

64604

に構成されている。

従つて、この種のものには目盛をいちいち読取る必要がないので読取ミスがないという利点があるが、反面薄暗い場所で使用する人や目の不自由な人にとつては表示内容の認識の点で今一つ問題があつた。

本考案は上記した従来の欠点に鑑み、計測値（測長データ）を聴覚にて認識できるようにした電子式スケールを提供するものである。

以下図にともづいて本考案の一実施例を詳細に説明する。

第1図はメジャーを例にとつた本考案に係る電子式スケールの外観図を示し、図中Aは電子式スケール本体、Bは巻尺本体、Cは測長データの音声報知スピーカを示す。電子式スケール本体Aの内部には測長の検知回路及び測長を音声合成にて音声報知する回路等が内蔵されている。

第2図はブロック構成図を示し、図中Bの巻尺本体は該本体を側面から見た図であり、これには単位長さ毎にスリットEが穿設されている。

(2)

接点Gと接点Hはスケール本体の電源スイッチを構成しており、これらは本体Aの巻尺の出し入れ口近傍にあつて、巻尺が完全に収納されている状態では巻尺の折曲げ端Iが接点Gの突起Jを図中左方向に押圧し、該接点Gが支点Fを中心として接点Hから離間し電源がOFFとなる様に、又巻尺をスケール本体Aから引き出したとき接点Gと接点Hが接触して電源がONとなる様に配設されている。

回転体Kの外周面には前記巻尺本体Bに設けたスリットEに係合する複数個の係合爪をスリットのピッチと同一ピッチで立設されており、この回転体Kは巻尺本体Bの出し入れと共に回転するように構成されている。

接点Qは通常バネPにより接点Rと離間状態にあるが、巻尺本体Bの引き出しにともなう回転体Kの時計方向の回転時に次々に到来する爪の押下作用で接点Rと接触、非接触を繰り返し、巻尺Bの引き出された量（測長）に関連したパルス数を発生するように構成されている、このパルス数はカ

(3)

ウンターCOUNTERにてプラスカウントされる。

一方、接点MとパネLと接点Nは前記接点Q、RとパネPとの関係と同一に構成されているが、接点MとNは回転体Kの逆回転（反時計方向の回転）で接触、非接触を繰返す。即ち、ここでは巻尺本体Bを収納した量に関連するパルス数が発生し、このパルス数はカウンタCOUNTERにてマインスカウントされる。カウンタCOUNTERにてカウントされた刻長に関する数値情報は順次インタフエースI/Dを介して中央演算処理装置CPUに転送される。

中央演算処理装置CPUでは転送されてきた数値データを一旦アキュムレータACC（図示せず）に記憶させ、この数値データと一定時間経過後に転送されてくる数値データとを比較し、両者が同一のときアキュムレータACCの数値データをボイスシンチャイザ（音合成器）VSに送つて音声信号に変換する。そしてその信号をアンプAMPで増幅しスピーカSPに送り音声報知する。

(4)

第8図はフローチャートを示し、これによつて今少し動作を説明すると、まずスケール本体の電源がON或いはOFFかを判定し（ジャッジJ1）、電源ONのときカウンタCOUNTERの内容をアキュムレータACCに入れる（ステップA1）。その後、ある一定時間経過後（ステップA2）、この時点におけるカウンタCOUNTERの内容と前記アキュムレータACCの内容を比較し（ジャッジJ2）、両者の内容が異なる場合にはステップA1に戻る。一方、前記両者の内容が一致するとアキュムレータACCの内容を音声報知すべくボイスシンチャイザVSに転送する。

このように、巻尺本体Bの引き出された量に関連する数値データを一定時間経過後のそれに関する数値データと比較し、両者が同一のとき前者の数値データを測長データとしてボイスシンチャイザVSに転送しスピーカSPにて音声報知する。

以上の如く、本考案に係る電子式スケールによれば、計測値を音声にて報知することができるので、使用場所が薄暗い所であつても、或いは使用

(5)